

子どもと学ぶ歴史教科書の会 講演会のお知らせ

講演 藤田 覚さん (東京大学名誉教授・日本近世史)

「近世は百姓と町人の世」

日時：2015年8月23日(日曜日) 10:30~12:30

《講演の要旨》

■今に続く近世の村と家

江戸時代の村や町は変化しながら、21世紀の今日まで存続している。また、江戸時代以来の家もいまだに存在する。村は、江戸時代を生きた百姓の生活と生産の小宇宙であった。

その村と家は、古代以来ずっとその地に存在したわけではない。近世史研究は、村や町の住民の手元に残った地方文書を使って発展してきた。村に残った古文書は、近畿地方の一部を除くとおおむね17世紀以降のものである。それより以前の古文書を見いだせないのは、現代にまで続く村の多くが、17世紀以降にできあがったことを意味している。

住民の多くが安定的に持続することにより村が続き、村が続くことにより住民も存続できるという相互関係にあった。村人は、助け合うとともに、時には抑圧的ともなる強い規制のもとに生活し、村を自治的に運営していた。このように村と家が永続できるようになったのは、日本社会の歴史のなかで特筆すべきことで、それを可能にする生産力の発展段階を獲得したからである。

■村の請負に頼る領主

近世の領主たちが全国を支配するために創り出した幕藩体制とよばれる近世国家は、その村に依存して成り立っていた。そのもっとも基本は村請制度である。年貢の取り立てというもっとも重要なことが、村の請負によって行われていた。

そして、江戸時代の領主支配や行政は、村請制度に代表される民間の請負に依存していたといえる。つまり、発達した村や町の民間社会による請負のうえに成り立っていた国家であり、政治・行政だったといえることができる。

村人は、その才知を発達させ、「綿花と底ぬけタンゴ」にみるような創意と工夫により生産を発達させた。近世の生産や流通の発達とは、領主の政策がもたらしたものではなく村や町の百姓・町人の奮闘が生み出したものだった。

《講師紹介》

藤田 覚 ふじた・さとる/1946年生まれ。

東京大学名誉教授。専攻は日本近世史。

著書に『泰平のしくみ江戸の行政と社会』(岩波書店、2012年)

『シリーズ日本近世史⑤幕末から維新へ』(岩波書店、2015年)など。